

史料館所蔵最古の歩兵第十六聯隊史

「第三回」 明治三十七八年戦役

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

【日露開戦の事情】

支那遼東半島は日清戦役の結果、一度我が領有に帰したるも、露・独・佛三国の忠告に基づいて、之を清国（今日の支那共和国）に還付した。然るに明治三十年の秋、清国山東省に於いて二名の独逸（ドイツ）宣教師が暴民の為に殺害せられるや、独逸政府は大いに清廷を責め直ちに軍艦を膠州湾に進めて之を租借地と為し、以って東洋発展の根拠地とした。所が膠州湾は従来露国がすでに冬季の軍艦碇繋場として居た処なので、其れを突然独逸の為に占領されてしまった為、露国は大いに狼狽し軍艦を遼東半島の旅順口に進めて之を占領したのである。

旅順口は何人も知るがごとく、渤海の開門であって稀有の天嶮、軍事上まことに重要な地である。かつて我が軍が幾千百の屍を積み、血を流して、日章旗を立てたる土地を東洋の平和という美しい辞柄（言いぐさ、口実）の下に、清国に還付せしめたのも実は自ら代って占領せんが為に外ならなかったのである。

露国が清廷を脅迫し、我国の面目を蹂躪して旅順口を軍事的に占領したのは、明治三十三年の三月二十七日であった。

其の年の五月北京に義和団の変が起こった。此の義和団が異教徒を殺害し、鉄道電線を破壊し、進んで外国公使館を包囲して、我が公使館書記生 杉山彬、独逸公使 ケットレル及び外人数名を殺害し、益々暴威を振れるに至れる為に、列国は直ちに出兵して共同作戦の下に之を鎮圧したるが、露国は此の機に乗じ、予ての野望を達し版図を拡張せんと、黒龍江・シベリアの二軍団を出動せしめ、本国より十二個の野戦病院を派遣し、之を五軍に分ち、名を草賊の征討に借りて、七月十四日から公然満州に侵入した。

即ち其の一軍はシベリアのハイラルより進んで愛琿ハイラルを占領し、第二軍はシベリアボーファより進んでサハリン・ヘルムホ・シンガリン・チチハルを占領し、第三軍はハバロフスクより進んでハルピンを攻略し、更に友軍と聯合して呼蘭城を降し、拉林を陥れた。第四軍は浦塩ストク及びパスシエニット湾より闖入して、琿春城を抜き寧古塔を陥れ、吉林を包囲して終に之をも占領し、第五軍は旅順より出でて牛荘・遼陽・奉天・鉄嶺・新民・安東を席捲して、同年の十一月には早くも満州の三省を確実に占領したが尚飽きたらず、更に竿頭一步を進めて韓国に向って侵略をこころみるに至ったのである。

斯くの如きは即ち明らかに、清国との公約を蔑視し又列国に対する保障を無視せる不信の行為であるのみならず、直接我が帝國の存在を脅威するものである。

是に於いて帝國政府は黙視すること能はず、先ず至誠を披瀝して露国政府との間に交渉を開き、相互の利益を調和し併せて東洋の平和を維持せんとして、協商の道を講じたるも、露国は毫も誠意を以って我に遇せず、徒に曠日彌久（何もしないで日を過ごし、事をながびかせる）して交渉を延期せしめ、其の間着々として海陸の軍備を充実して、韓国の境上に臨み、陽に我国を威嚇せんとする如き行動に出でたるを以って、国民の公憤は勃然として発し、国論沸騰して政府に開戦を促し、三十六年暮秋の頃より暗雲低迷して滿韓の野を蔽い、風雲の徂徠頗る急であったが、彼我の妥協終にならず。

翌三十七年二月八日、我が駆逐艇は旅順港に敵の軍艦を夜襲して、最初の一撃を加え次いで九日、我が艦隊の一部は木越旅団を護衛して仁川港に敵前上陸を敢行したる後、同港外に敵の巡洋艦ワリャグ及びコレーツを誘き出して、之を撃破し戦端は遂に開かれるに至った。

露国に対する開戦の理由は、二月十日を以って公布せられたる宣戦の大詔に詳らかである。「詔書」略

【動員・出征】

二月五日午後七時、第二師団の動員を令せらる。近衛及び第十二師団と共に実に先頭第一の動員であったから、歓呼の声は忽ち営内に溢れ万歳の声は満街に響き渡った。

志気の旺盛なること無類、病卒は病を隠して起ち、傷兵は傷を包んで奮い、偶々健康の身を以って留守部隊に編入せられた者の如きは、死を決し血を注いで出征を請い、殆ど之が慰藉の辞に苦しむ有様であった。然れば応召員の如きも、満腔の喜悦と熱誠とを以って続々踵を接して来集し、活気旺盛せる裡にも能く軍紀の森厳を保ち、平時に於いてすら見得べからざる静粛と規則とを以って、動員の事務は着々として処置せられ、時恰も嚴寒積雪の候なるにも拘らず所定の期日に先立つこと一日、即ち二月十二日を以って全く充員を完結した。

第十二中隊は清国天津に駐割中なるを以って、動員第八日補欠中隊の編成を命ぜられ、僅々四時間にして其の編成を終わった如きも又特筆するに足る事項である。

二月二十二日、聯隊長以下三千の将卒は営庭に整列し、軍旗を奉迎して莊嚴なる出戦式を挙行し、遙かに皇城の天を拝して大元帥陛下の萬歳を祈り、次いで聯隊の武運長久を祝して、第一大隊は即日、自余の隊は翌二十三日菖蒲城を発し、途次熱烈なる歓呼に送られつつ沼垂に出で、順次鉄道輸送に依りて高崎市に集合し、居ること数日、更に広島に至り

て師団の集結を終わり、台一軍戦闘序列を命ぜられて黒木大将の隷下に入った。

広島に駐留すること又数日、愈々三月二十・二十一の両日を以って聯隊は、運送船加賀丸・第二永田丸・横浜丸・孟買丸の四隻に分乗して、宇品湾頭勇ましくトモズナを解き、海上帝国軍艦に護衛せられつつ馬關より朝鮮海峡に出で、朝鮮半島の西岸を航行して三月二十三・二十四日に互りて大同江口 鎮南浦に到着、同二十六日上陸を終わって上七里附近に宿営し、翌二十七日より北進の途に上った。

当時夜寒尚激しく、気温零度を下ること少なからざるも、日中は風柔らかに春光融々として半島に浴ねし。古来殆ど自然のままに放任し、若しくは今次の進軍にあたって急造したる大小の道路は、恰も解氷期に際せる為、一晴一雨、地表の凍結を解く毎に甚だしく不良となり、且つ土質は一般に赤色粘土にして地盤軟弱、若干の車輛通過すれば、忽ち泥濘膝を歿するに至り宛ら泥の海を渡るに異ならず。

或る日の如きは砲兵聯隊が終日の行軍に依って、僅か半里を行軍し得たと云う一事に依っても其の行軍の困難なりし一斑が推測せられよう。我が第二大隊の如きも一日に馱馬三頭を斃したことがあり、又道路を横切る大小河川には一つの橋梁なく、架橋或いは舟筏（ふね・いかだ）に依るには多くの時間を費やすを以って、やむを得ず徒渉することが多かった。歩兵隊は往く往く工兵を援けて道路を修繕し、又砲兵隊を援けて砲車弾薬車等の推輓に全力を尽くした。

苟くも材料となし得べき物は、之を用い尽くして尚足らず、樹木という樹木は余す所なく伐採して之を埋填した。加えるに北進するに従って人烟希薄、物質窮乏、土民を雇えども怠惰にして物の役に立たず、伝染病は流行し軍需品の輸送は停滞するという有様であったが、堅忍一閱月、よく飢渴と疲労とに打勝てる我が一軍の精銳は、四月下旬予定の如く鴨緑江の左岸に開進を終わって同河右岸に依れる敵と相對した。

【九連城附近の戦闘】

清韓両国の境界を成せる鴨緑江は、支流・本流・鬩河の三條に分かれて紆余繞回し、此の間砂場広さ二里、点々たる漁家は麥圃を綴り、嫋々たる楊柳は白砂を彩り、春風春霞を弄して江上にたなびき、日露両軍が此の江を挟んで帶甲十萬兵馬千乗、戦雲天を蔽い殺氣地に満ち、乾坤転旋の大活劇まさに旦夕に迫りつつあるを知らざるものの如くである。

此の時敵は九連城の前面鬩河に臨める摺鉢山を中堅として、北は腰溝・葦子溝の高地脈より南老龍頭に亘りて堅固なる数層の堡壘を築き、又虎山北方高地に有力なる前進陣地を構え、別に鬩河を渡りて中江台・於赤島・九里島に監視哨を配置し、更に遠く安東縣に一支隊を駐めるなど、天嶮の地形を利用し人工の精を加えて我を待ちつつあった。且つ開戦前露兵の我が軍を軽蔑すること甚だしく、白昼兵を堡壘に配して演習を行い、鬩河に下り

て馬に飲ませ、又陣地に集合暴露して嬉戯し、眼中に日本兵無きの態であった。且つ二十一日、当面の軍団長ザスリッチ中将、九連城に来たりて地形を視察し、「好個の天嶮、三ヶ月を支えるに充分である」と言ったとか。所が哀れや三日も保たずして陥落するに至ったのである。

二十八日軍命令に依り、左の如く部署せらる。

第二師団は三十日社山洞西北方低地に集合す。五月一日台一軍橋及び虎山の山系を経て前進し、虎山西端より艾河川（下鬮河尖東南端）に亘る間を占領す。

四月三十日春風曉霧を払って笑うが如き虎山の潺顔碧空に頭われ来るや、近衛師団の野砲陣地より響き渡る一発の砲声を合図に、近衛及び第二師団の野砲並びに重砲兵隊は一斉に砲口を開いて敵陣を轟撃し、敵も又全砲門を開いて必死に応射し彼我の砲百五十門、砲声山河を揺るがし砲煙天地を蔽って砂塵を巻き、石礫を飛ばし、山を砕き、壘を覆し、砲礮を摧き、砲手を殲し、其の悲壯惨憺たる光景は敵をして心胆を寒からしめ、我が将卒をして愈々奮い起たしめた。

猛戦約二時間、敵の中堅たる摺鉢山砲台は遂に沈黙するに至った。斯かる間に工兵隊は敵の砲弾下に架橋を強行し、歩兵隊は夫々所命の陣地を占領して攻撃を準備した。即ち聯隊は三十日午後社山洞北方低地に集合終わり、午後七時三十分命に依りて集合地を發し、第一・第二・第三軍橋を通過して、第三大隊（第十二中隊欠）は艾河尖南方断崖に至りて予備となり、第二大隊は歩兵第三旅団の左翼に連繫して艾河尖西南方約四百メートルの地区に、第一大隊は第二大隊の左翼より艾河尖西南方八百メートルにある本道上十字路附近に展進した。時に五月一日午前二時。

一日午前八時二十分攻撃前進の命を受け、聯隊は九連城北方摺鉢山を攻撃目標として前進に移り、各中隊は咄嗟数班に分かれて各一団となり、号令一下万歳を高唱しつつ武装のまま流れを乱して一斉に鬮河の急流に躍り入った。

之を見た敵兵は、三面より我が頭上に酷烈なる銃砲火を集中し、豆を煎るが如き機関銃丸は弗々として波に声を立て、初春とは言え水中の寒気は骨を刺すが如きものあるに拘らず、將た水勢急にして水は胸を浸し肩に及ぼんとするをも意とせず、先を争って猛進し百メートルに余る急流を、十数分間にして徒渉し彼岸に上るや死角内に入りて隊伍を整頓し、滴る水を絞りも敢ず前進ぬれ鼠となりたるままにて、銃剣を揮って呐喊驀然（爆發的に大声をあげ、真つすぐ突進むこと）に敵壘に突入し、頑強なる敵の抵抗を撃攘して其の第一線陣地を奪い、第一大隊は摺鉢山に、第二大隊は其の左翼に、第三大隊は更にその左翼なる九連城西方高地を占領して攻撃を続行した。

然るに敵は第二線に踏み止まりて、尚頑強に抵抗し、殊に其の砲兵は第一線部隊の退却を收容する為に火力を極めて猛射し、友軍よりも著しく凸出して、孤軍突進せる聯隊の損

害は頗る多数に上ったが、八時四十分頃より敵は小棲房・蛤蟆塘方向に潰走し始めた。

先登第一、九連城頭高く旭旗翻して万歳を三唱したものは吾が歩兵第十六聯隊であった。直ちに追撃射撃を行い、九時二十分我が射距離内に敵の隻影を見ざるに至って止む。

斯くの如く聯隊が敵の中央を突破するや、各隊も次いで灤河を渡り、右は栗子園・葦子溝より、近くは聯隊の右翼に亘る線を占領し、敗敵を蛤蟆塘附近に包囲して殆ど之を全滅に帰せしめた。

同日午後四時、聯隊は追撃を他隊に譲りて安東縣方向に転進し、黄昏同地に到達して軍の左翼警戒に任じた。

【摩天嶺の逆襲戦】

五月五日軍は追撃前進を起して、六日鳳凰城を占領し此の地を中心として寛甸・寨馬集・遼陽・岫巖の諸街道に亘り、半円形の警戒線を張って暫く帯陣の姿勢に移り、聯隊は鳳凰城の西南方四台子附近の警戒に任じた。

同月十一日、第十二中隊は偵察の命を受けて雪裡站附近に出動し、三百五、六十の歩騎兵より成る敵の一隊と戦闘を交え、敵の将校 黒龍江コサック騎兵二等大尉フオニハーフを生禽（いけどり）した。我が損害 戦死 兵卒一。負傷 将校一。

六月下旬、軍は左の如く三縦隊となりて北進の途に就き、岡崎旅団は師団前衛となりて右翼第十二師団、中央第二師団、左翼近衛師団は六月二十三日出発、行く行く土門子・張家堡子・煙台・和尚庄の敵を撃退し、破竹の勢いを以って分水嶺・連山関の嶮要を畧して同月三十日、遂に石門嶺（吾が聯隊）摩天嶺（村松聯隊）新開嶺（第三旅団）の線を占領した。

即ち聯隊（第一大隊欠）は師団の最右翼に位置して、聯隊本部を下馬塘の置き右翼前哨として第九中隊を背陰亭に、中央前哨として第六中隊を石門嶺に、左翼前哨として第八中隊を小高嶺に出して、橋頭・大安平・塔湾の三方面に備え、第一大隊は軍の左側警戒の任を受けて第一第四軍間に在る新開嶺方面に於いて独立動作を取った。

摩天嶺の嶮は、遼陽街道上山峽第一の要害にて、山岳重疊、河流縦横、人烟希薄にして道路は陰悪を極む。なかんずく吾が聯隊の警備区域は、正面四里広きに亘り、此の間幾層の高峯と数条の溪流とは相錯雑し、羊腸たる山系は辛うじて駄馬を通じ得るに過ぎず、交通の不便と警戒の困難とは、蓋し想像の外であった。

七月四日敵の歩兵二大隊が、村松聯隊を摩天嶺に逆襲せる以来、我が警戒は愈々嚴重を

極め日夜防御工事の構成に従事しつつあったが、十四五日頃より敵状漸く活気を呈し来り、遂に十七日午前十二時頃から我が師団の全線に向って、大々的夜襲を試み殊に摩天嶺方面は敵将ケルレル約一個師団を率いて、潮の如く殺到して来た。

【石門嶺の激戦】

我が前哨第六中隊は主力を大道溝に、小哨を石門嶺に置いて王家堡子方向に対して警戒中、十七日午前五時、摩天嶺・小高嶺方面に激しき銃声を聞いたので、直ちに斥候を派して状況を偵察せしめたるに、同五時四十分小陳家堡子方面より兵力未詳の敵兵、模糊たる曉霧を衝いて陸続前進し来るとの報に接し、中隊は即時小哨北方約五百メートルなる予定防御陣地を占領して、射撃を開始した。

然るに敵は須臾に増加して約二個中隊となり、更に一個大隊となり、戦線を暫時東北方に拡張して我が右翼を包囲し、且つ其の一個中隊は我が右側前百五、六十メートルの森林を占領して、強烈なる側射を浴びせ、次いで其の北方なる断崖絶壁を成せる岩山も又敵の占領する所となった。

第六中隊は此の優勢なる敵を引受けて奮戦中、午前七時、中隊長末松大尉、大腿に貫通銃創を受け流血を押さえ苦痛を忍んで、尚も志気を継続して居たが、遂に昏倒して後送せられ、後藤中尉代って中隊の指揮を執ったが間もなく戦死し、浦野少尉代ったが是又須臾にして斃れ、佐藤少尉・熊倉特務曹長・野田曹長等相次いで負傷し、兵卒も又其の三分の一を失うに至った。

比較的軽傷の佐藤少尉疼痛を忍んで、一時戦線を指揮して居たが、是も久しからずして後退し、中隊は遂に全く指揮者を失うに至った。然れども尚遠藤・長崎・高橋・久保田の諸軍曹あり、部下を激励して協力一致、あくまでも陣地を死守して一步も退かず、負傷者も多くは戦場を去らず銃を手にして戦闘を続けた。

同時に小高嶺及び背陰亭の哨所も同じく敵襲を受け、聯隊長 谷山大佐は下馬塘に在って三方面（此の間四里）の戦闘を督しつつあったが、石門嶺方面の戦闘最も激烈なることを察知して、独断を以って之を救援するに決し、自ら其の手中にありたる第十一・第十二中隊を率いて石門嶺に急行し、直ちに之を第六中隊の右翼に増加し午前九時、初めて敵と大差なき射撃効力を発揮するに至った。

前記岩山の前にある森林は、敵の拠点となれるものなれば第十一・第十二中隊は協力して此の森林を我が手中に収めん為、各一個小隊を以って此の森林に突撃せしめたが、敵も又予備隊を増加して応戦頗る努め、品田小隊は全く死地に陥りて全員の三分の二を失い、田村大尉、品田中尉、多田特務曹長等枕を並べて死傷し、牛圓大尉も又腹部に重傷をうけた。

石門嶺方面苦戦の報伝わるや、諸方の友軍は期せずして其の急に赴いた。小高嶺に向って赴援中の第五中隊は、卒然方向を転じて石門嶺に急行し、第十中隊又同方面の追撃を中止して引返し、共に右翼と中央とに増加し、又下馬塘の医務室にあった十数名の患者は、軍医の在らざるに乘じ、苟くも執銃歩行し得る程の者は悉く武装を整えて戦線に駆けつけた。

斯くの如くして我が兵力、漸く敵を圧倒するに至れる所に、午後二時又も第七中隊は小高嶺方面に戦闘の後、峻嶺を横断して来り会し、午後四時半頃から敵は遂に王家堡子方向に退却を始め、我が酷烈なる追撃射撃を受けつつ、午後六時全く其の影を見ざるに至った。

此の日新開嶺に在った第一大隊は原隊に復帰を命ぜられ、午後一時連山関の師団司令部に達して師団の予備隊を命ぜられたが、聯隊の苦戦を聞いて座視難く、大隊長 仁平少佐は再三師団長に懇請嘆願して、遂に聯隊救援の許可を受けるや、朝来行軍の疲労をも打ち忘れ流汗拭いも敢ず直ちに急行軍を以って、午後四時下馬塘に到着した。此の時敵は既に退却を始めたるを以って戦線に就くに至らなかったが、其の友軍を思う至情は聯隊長以下をして頗る感激せしめた。

同時に小高嶺に在る前哨第八中隊は、歩兵約一個中隊の襲撃を受け、小野崎小哨は若干抵抗の後防御線に退却して防戦中、敵の兵力は三個中隊に増加し頗る苦戦に陥ったが、第二大隊長 加藤少佐は第七中隊を率いて増援し、次いで第三大隊長 白川少佐も第十中隊を率いて赴援し、協力して此の敵に当たり日没前遂に之を塔湾方向に撃退した。

背陰亭の前哨第九中隊の前面にも、敵の歩騎兵各三四十出現して、我を射撃したるも、難なく之を撃退し、正午頃其の歩兵約二個大隊、徐家堡子附近谷地に進入したるも遂に前進し来らず、再び戦闘を交えることなくして終わった。死傷者無し。

石門嶺に於いて最も奮戦し、中隊の現員過半を失うも防戦三時間に及び陣地を死守した第六中隊に対し、第一軍司令官 黒木大将より感状が授与された。

参考文献

「大正十一年版 歩兵第十六聯隊史」より